國學院大學学術情報リポジトリ

名古屋東照宮祭とからくり人形：尾張における曳きものとからくり人形の展開について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉野, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002042

名古屋東照宮祭とからくり人形
―尾張における曳きものとからくり人形の展開について―

吉野　亨

要旨

本論文では、尾張地域においてからくり人形を載せた曳きものが偏在している理由について、からくり人形の受容の起点となったと考えられる尾張地方の中心である名古屋にある名古屋東照宮にて行なわれていた名古屋東照宮祭礼におけるからくり人形の変遷と受容について考察を試みた。既に、山崎構成や千田靖子により尾張地域におけるからくり人形の偏在性と、その偏在性に江戸時代大阪を中心に興行を行っていたからくり人形の演劇を行う「竹田機巧座」が関係している可能性があると指摘されていた。その先学の指摘を踏まえつつ、今回名古屋東照宮祭礼について考察を試みた結果、東照宮祭礼におけるからくり人形はその製作を主に京都・大阪の「細工師」「細工人」が請け負っていたこと、江戸中期にかけては「竹田機巧座」を開いた竹田近江の流れを汲む人間がからくり人形の製作にかかわり、長者町の二福神車のからくり人形は文献より「竹田機巧座」にその作製が依頼されていたことが窺えた。また、二福神車のからくり人形の色の塗りなおしの際には、「竹田源吉」という竹田姓を名乗る人物が関わっており、この人物が尾張周辺のからくり人形を幾つか手がけていることからも、江戸中期以降名古屋には「竹田機巧座」の技術的な流れを組む細工人がいたことが確認出来た。

キーワード

曳きもの、尾張地方、名古屋東照宮、祭礼、からくり人形

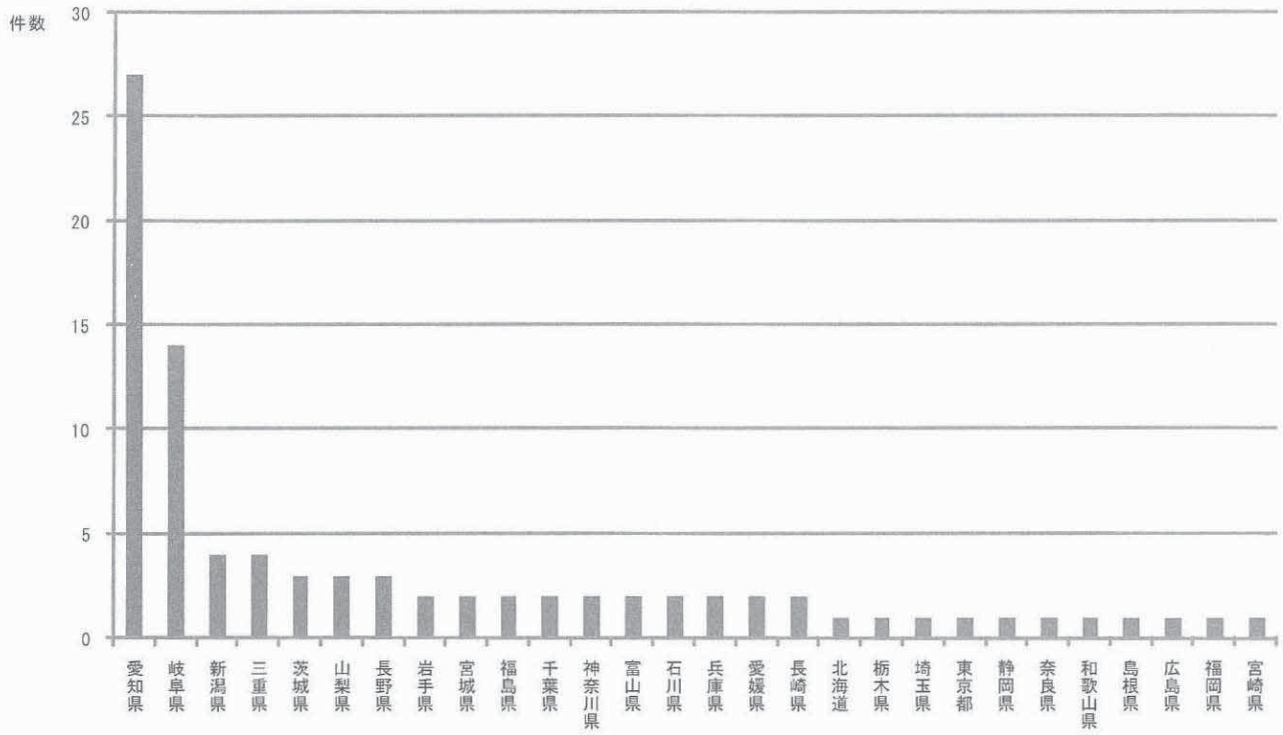
一　はじめに

はじめに、曳きものとからくり人形については、山崎久松[1]や千田靖子[2]により、尾張地域の曳きものからくりの件数が突出していることに加え、からくり人形の地域展開に「竹田機巧座[3]」が関係している可能性があるとの指摘がされている。また、山田和人によって「竹田機巧座」のからくり人形「傀儡師」と岡崎市の曳きものからくりの機構が近似しているとの指摘がされている[4]。これらのことからも、「竹田機巧座」と尾張地方における曳きものからくりの展開は、密接な関わりがあることが予想される。

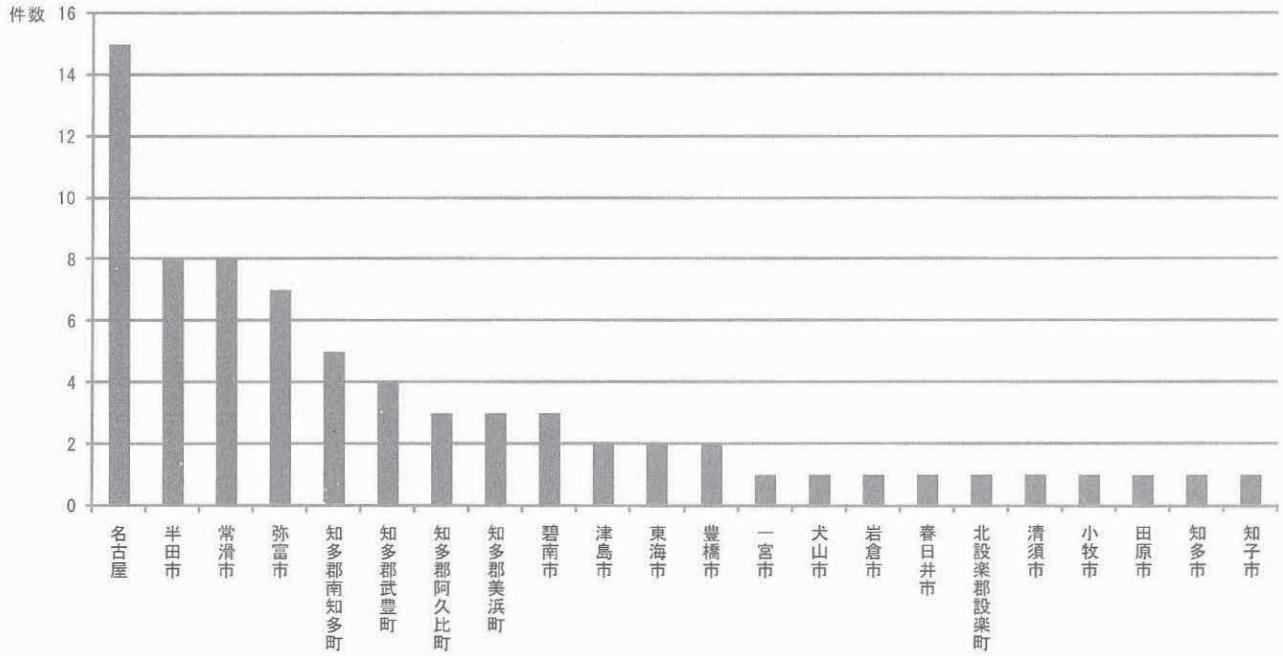
拙稿においても[5]、先行研究での指摘を踏まえつつ、全国におけるからくり人形を載せる曳きもの件数について、愛知県特に名古屋を中心とした尾張地方が突出していることを集計したデータよりその偏在性を確認した。（図一）及び（図二）を見ても分かるように全国における曳きものに載せるからくり人形の数は、愛知県が群を抜き多く、その愛知県に於いても特に名古屋市を中心に偏在していることが見て取れる[6]。その上で、拙稿では「竹田機巧座」と尾張地方の曳きものからくりの関係性及び、からくり人形を生み出したからくり人形師に焦点を当て先行研究の指摘の再検証を試みた。

結論としては、尾張地方における曳きものからくりの展開は、第一に「竹田機巧座」が曳きものからくりの地域展開に関係している可能性がある事、第二に名古屋における若宮八幡・東照宮祭礼におけるからくり人形の受容をきっかけに名古屋へのからくり人形師の出現が促されたことにより、尾張地方における曳きものからくりの展開の契機となっている可能性を指摘した。

第一点目については、名古屋東照宮の曳きものに載るからくり人形の多くが竹田近江の手によるもの称されている事こと、また東照宮祭礼以降に登場



（図１）全国におけるからくり人形を載せる曳きものが出る神社の件数



（図２）愛知県におけるからくり人形の載る曳きものが出る祭礼の件数

（表１）からくり人形師一覧

元号	西暦	祭礼	山車	人形名	人形師	人形師の所在地	備考	出典
延宝4年	1676年	名古屋　若宮祭り	福禄寿車	福禄寿	山伏多門院	京都	福禄寿の人形の頭部分内に、「延宝四年丙辰六月吉祥　町内安全願人左門院」とあり。	『曳山の人形戯』
宝永4年	1707年	名古屋東照宮祭礼	小鍛冶車（京町）	三条小鍛冶が狐面	竹田近江	大阪	伝竹田近江	『図説からくり人形の世界』
宝永4年	1707年	名古屋東照宮祭礼	唐子車（宮町）	唐子が太鼓を打つ	竹田近江	大阪	伝竹田近江	『図説からくり人形の世界』
享保18年	1733年	名古屋東照宮祭礼	林和靖（伝馬町）※現存せず	鶴追いの唐子	山本飛騨掾	京都	伝山本飛騨掾	『図説からくり人形の世界』
享保19年	1734年	名古屋東照宮祭礼	林和靖（伝馬町）※現存せず	林和靖	玉屋庄兵衛（初代）	名古屋玉屋町		『図説からくり人形の世界』
寛保2年	1742年	犬山市　犬山祭	国香欄	文殊・唐子・獅子	矢場町甚四郎	名古屋矢場町		『図説からくり人形の世界』
宝暦11年	1761年	名古屋市　若宮祭り	福禄寿車	蓮台で倒立の唐子	竹田藤吉（鳶屋藤吉）	名古屋	蓮台に「宝暦拾壱辛巳天六月吉日」「細工人　鳶屋藤吉」の墨書有り。	『曳山の人形戯』
明和4年	1767年	名古屋　若宮祭り	福禄寿車	蓮台で倒立の唐子	竹田寿三郎	名古屋	言い伝えでは、鉦叩きの唐子を太鼓叩きと倒立の唐子の造り替えたと言われている。	『曳山の人形戯』
安永3年	1774年	犬山市　犬山祭	咸英（本町）	蓮台で倒立の唐子	竹田藤吉（鳶屋藤吉）	名古屋	安永3年（1774）	『図説からくり人形の世界』
安永3年	1774年	犬山市　犬山祭	真先（魚屋町）	乱杭渡り唐子	竹田藤吉（鳶屋藤吉）	名古屋	安永3年（1774）の作（現在の人形は9代目玉屋庄兵衛の平成9年の作）	『図説からくり人形の世界』
安永4年	1775年	犬山市　犬山祭	應合子（下本町）	應合子	文吉離三（名古屋文吉二三坊）	名古屋	安永4年（1775）作	『図説からくり人形の世界』
安永5年	1776年	犬山市　犬山祭	西王母（中本町）	西王母、綾渡りする唐子	竹田藤吉（鳶屋藤吉）	名古屋	安永5年（1776）の作	『図説からくり人形の世界』
天明4年	1784年	名古屋　若宮祭り	福禄寿車	蓮台で倒立の唐子	鬼頭二三延忠	不明	倒立の唐子の腹に「天明四甲辰年鬼頭二三延忠直之」との墨書あり。	『曳山の人形戯』
天明5年	1785年	岩倉市　岩倉祇園祭	杉山車（下本町）	采振り神子と菅丞相肩車・蓮台倒立唐子	隠居吟笑	不明	采振り・神子と菅丞相は土地の人の作と言う。肩車・蓮台倒立唐子は天明5年（1785）隠居吟笑の作と伝えられる。	『図説からくり人形の世界』
天明5年	1786年	常滑市　大野祭	唐子車（高須賀町）	唐子	竹田藤吉（鳶屋藤吉）	名古屋	町内保存の「弘化丁未四歳五月吉日　永代記録」に「名古屋藤吉謝礼人形作人」との記述あり。	『曳山の人形戯』
寛政2年	1790年	美浜町　河和天神社祭礼	北車（北組）	上山に唐子遊び	竹田藤吉（鳶屋藤吉）	名古屋	蓮台の一本柱の下部に、「寛政庚戌六月吉日　鳶屋藤吉作」の墨書が見える。	『曳山の人形戯』
寛政8年	1796年	戸田市　戸田祭り（戸田八幡神社）	一の組	押し唐子二体・倒立唐子	文吉離三（名古屋文吉二三坊）	名古屋		『曳山の人形戯』
寛政8年	1796年	戸田市　戸田祭り（天満宮）	二ノ割	唐子逆立遊び	文吉離三（名古屋文吉二三坊）	名古屋		『曳山の人形戯』
寛政8年	1796年	戸田市　戸田祭り（白山車）	白山車（四ノ割）	肩車から紐につり下がる唐子	文吉離三（名古屋文吉二三坊）	名古屋	人形箱の蓋裏に、「寛政第八丙辰秋八月吉祥日、神事車儡人形穐、名護屋俗名文吉二三坊細工、戸田村四之組什物」とありる。	『曳山の人形戯』
文化8年	1811年	小牧市	中町	文字書き人形	玉屋庄兵衛（二代目）	名古屋玉屋町	記録のみ	『図説からくり人形の世界』
文政3年	1820年	名古屋市　有松天満宮秋季大祭	布袋車（東町）	布袋人形	玉屋庄兵衛（二代目）	名古屋玉屋町	玉庄（玉屋庄兵衛）作と言われる。	『図説からくり人形の世界』
文政7年	1824年	名古屋市　有松天満宮秋季大祭	布袋車（東町）	采振り人形	玉屋庄兵衛（二代目）	名古屋玉屋町	玉庄（玉屋庄兵衛）作と言われる。	『図説からくり人形の世界』
文政7年	1824年	一宮市　石刀祭	山之小路車（山之小路）	倒立の唐子・綾棒さがり	隅田仁兵衛（栄重）	名古屋末広町		『図説からくり人形の世界』
文政10年	1827年	犬山市　犬山祭	梅梢戯（外町）	倒立の唐子	玉屋庄兵衛（五代目）	名古屋玉屋町	人形納箱の側面に「文政十年亥八月吉人形細工人　名古屋古渡新町玉屋正兵衛五代目」との墨書有り。	『曳山の人形戯』
文政12年	1829年	半田市　半田祭り	唐子車（北組）	太鼓打ちぶら下がり唐子	隅田仁兵衛（栄重）	名古屋末広町		『図説からくり人形の世界』
文政12年	1829年	小牧市　小牧秋葉祭	聖王車	大将人形	隅田仁兵衛（栄重）	名古屋末広町		『図説からくり人形の世界』
天保2年	1831年	名古屋東照宮祭礼	湯取神子車	神主・神子・囃子人二人	隅田仁兵衛（栄重）	名古屋末広町	天保二年以前の旧車は筒井天王祭の湯取車として現在も曳きだされている。	『図説からくり人形の世界』
天保6年	1835年	名古屋市　牛頭天皇祭	牛頭天王車	豊太閤	住田仁兵衛（藤原真守）	名古屋市末広町		『図説からくり人形の世界』
天保6年	1835年	常滑市　大野祭	紅葉車（橋詰町）	采振り人形・倒立の唐子	玉屋庄兵衛（五代目）	名古屋玉屋町		『図説からくり人形の世界』
天保7年	1836年	清須市　枇杷島祭	王義車		隅田仁兵衛（栄重）	名古屋末広町		『図説からくり人形の世界』
天保12年	1841年	名古屋市　中村区神明社祭	唐子車（内屋敷）	梅の木倒立唐子	祭仙人		梅の木倒立唐子の蓮台裏に、「天保十二年辛丑奉　祭仙人作之」と墨書あり。	『曳山の人形戯』
天保14年	1843年	半田市　下半田祭	唐子車（北組）	三番叟	住田仁兵衛（藤原真守）	名古屋市末広町		『図説からくり人形の世界』
弘化2年	1845年	半田市　亀崎潮干祭	青龍車（石橋組）	前掛の布さらし	竹田　源吉	名古屋	人形に記銘あり。	『曳山の人形戯』
弘化2年	1845年	半田市　亀崎潮干祭	力神車（中切組）	猩々	竹田　源吉	名古屋		『曳山の人形戯』
弘化2年	1845年	半田市　亀崎潮干祭	花王車（西組）	神官	竹田　源吉	名古屋		『曳山の人形戯』
弘化3年―4年	1846―1847年	清須市　枇杷島祭	頼朝車（問屋町）	源頼朝・静御前	住田仁兵衛（藤原真守）	名古屋市末広町		『図説からくり人形の世界』
弘化2年	1846年	東海市　横須賀祭	本町組	采振り・瓶割り唐子	竹田　源吉	名古屋		『図説からくり人形の世界』
弘化4年	1847年	津島市　津島祭	中町車（神守町）	林和靖	住田仁兵衛（藤原真守）	名古屋市末広町		『図説からくり人形の世界』
嘉永元年	1848年	常滑市　大野祭	梅栄車（十王町）	渡唐天神・陵王人形	住田仁兵衛（藤原真守）	名古屋市末広町		『図説からくり人形の世界』
嘉永6年	1853年	東海市　横須賀祭	八公車（公通組）	倒立の唐子	玉屋庄兵衛（五代目）	名古屋玉屋町		『図説からくり人形の世界』
安政年間	1854―1856	東海市　横須賀祭	北町組	采振り・倒立の唐子	玉屋庄兵衛（五代目）	名古屋玉屋町		『図説からくり人形の世界』
安政2年	1855年	名古屋市　牛頭天皇祭	牛頭天王車	采振り人形	玉屋庄兵衛（五代目）	名古屋玉屋町		『図説からくり人形の世界』
安政3年	1856年	小牧市　小牧秋葉祭	聖王車（横町）	幣振り人形・姉弟唐子	玉屋庄兵衛（五代目）	名古屋玉屋町	人形箱の箱書に「安政三年辰七月　細工人　五代目玉屋庄兵衛」と墨書有り。	『図説からくり人形の世界』
安政4年	1857年	名古屋市　中村区神明社祭	紅葉狩車	維茂・更科姫・従者・采振り	竹田　源吉	名古屋		『図説からくり人形の世界』
安政5年	1858年	美浜町　野間神社　上野間祭	日之出車	源義経・東雲姫・監物太郎と馬	竹田　源吉	名古屋	町方資料の内『御車再造帳』に「安政五年八月吉日」と記し所に「人形買物覚、門前町、竹田源吉、三十六両」との記載有り。	『曳山の人形戯』

する愛知県各地のからくり人形の多くが竹田藤吉・竹田源吉等の竹田性を名乗る人形師により作成が行われていたことから「竹田機巧座」の可能性が指摘出来る。第二点目については、（表三）で表したとおり、名古屋東照宮祭礼以降において名古屋に在住すると考えられる人形師―玉屋庄兵衛・矢場町甚四郎・名古屋文吉二三坊―が尾張地域におけるからくり人形の作成に携わっていたことから指摘が可能である。[7]

ただし、展開の起点となったと推測される東照宮祭礼の実態や祭礼においてどのようにからくり人形が受容されていったのかについては、不明瞭な点が多い。既に名古屋東照宮祭礼については伊勢門水『名古屋祭』にて祭礼の概要及び、曳きものとからくり人形について触れられている。[8] しかしながら、『名古屋祭』が示す概要の典拠となる文献等が明示されていないので、その典拠となる文献について確認を行う必要性がある。

よって本稿では、尾張地域における曳きものにからくり人形の受容と展開の起点となった可能性ある名古屋東照宮祭礼について、『名古屋祭』からその概要を確認し、典拠の確認を行なってゆく。その後に、東照宮祭礼における曳きものからくりと製作者の関係を視野に入れつつ、東照宮祭礼以降の曳きものからくりの地域展開について論じることにする。

二、名古屋東照宮祭礼と曳きもののからくり

名古屋東照宮祭礼とは、元和の頃より始められたとされる名古屋東照宮における神輿渡御の祭礼である。この渡御には、名古屋城下の各町から曳きものや練物が出されており、その内の九輌に曳きものからくりが載っていたとされる。これら曳きものは戦前まで祭礼に曳きだされていたが、空襲により曳きものが焼失し、現存しているのは新車の建造に伴い天保二（一八三一）年に名古屋市筒井町に譲渡された桑名町の曳きもののみとなっている。[9] よって、東照宮祭礼については文献や戦前に記された伊勢門水『名古屋祭』からその姿を窺い知る他ないのが現状である。特に『名古屋祭』では東照宮祭礼に出る曳きもの及び曳きもののからくり人形の由来、製作者について詳しいが、その出典などが明らかにされていない為、特に曳きもののからくり人形を誰が製作したのか文献を見直していく必要性がある。

明治四十三年に伊勢門水により記された『名古屋祭』は、名古屋周辺における曳きものが出る祭りについてその次第と由来について記したもので、山崎や千田も名古屋周辺の曳き物祭礼の由来などを記す際に引用をしている。では、『名古屋祭』に示されている東照宮祭礼の沿革と曳きだされていた曳きものの詳細について少しまとめてみたい。

東照宮祭礼の始まりは、徳川家康の三回忌に当たる元和四（一六一八）年名古屋東照宮が鎮座する元和五（一六一九）年以前より行われていたとしている。後に元和五年には東照宮鎮座の際に頓宮を設け、翌六（一六二〇）年には神輿渡御の祭礼を行なわれるようになったとしている。元和四年の祭礼開始より、甲冑歩行二十人や七間町・西鍛冶町・桑名町等より警固を出したとしている。そして寛永七（一六三〇）年には伶人が路楽を奏するようになり、供奉として七間町からは能人形を載せた曳きものを出すなど、各町から練物が出されるようになり、慶安・承応の頃には雷電車や道成寺車も祭礼に加わったとしている。また、はじめに曳きだされたとされる七間町の曳きものは、大八車の上に粗末な人形を載せたもので、それ以降時代が下るにつれて各町から曳きものが曳きだされるようになる。（表二）

これら曳きもの以外にも各町からは警固と呼ばれる仮装した人々が行列に参加していたが、これについての詳細はここでは割愛する。以上が『名古屋祭』に提示されている名古屋東照宮祭礼の概要である。

さて、これら東照宮祭礼の由来について、『名古屋祭』では曳きものの来歴の一部に関しては各町の文書を典拠としている旨が注記されているが、その他の箇所については典拠となる文献等が明示されていない。[10] そこで、改め

て東照宮祭礼の沿革及び曳きものの変遷について、文献資料から確認を行なっていく。

（表２）『名古屋祭』に見る名古屋東照宮祭礼の山車とからくり人形

町名	山車名	創始年代	からくり人形	人形師
七間町	西行桜車	元和５年（１６１９）	からくりではなく能人形	不明
七間町	橋弁慶車(以前は西行桜の車)	元和６年（１６２０）	弁慶・牛若丸・麾振り（以前は西行桜の能人形）	不明
和泉町	雷電車	承応元年（１６５２）	雷神	不明
長者町	道成寺車	明暦２年（１６５６）	道成寺・麾振り	不明
桑名町	湯取神子車（天保二年に新調）	万治元年（１６５８）	幣持ちの神主・神子	不明（補修は小細工師二郎八、天保２年に新調の際には隅田仁兵衛）
本町	猩々車	万治元年（１６５８）	女猩々・男猩々・麾振り	山門山城守
宮町	石引車	寛文２年（１６６２）	平岩主計の人形	不明
傳馬町	梵天王車	元禄４年（１６９１）	元禄の絵図によれば麾振り	不明
中市場町	石橋車	宝永元年（１７０３）	文殊大士・童子・獅子・唐子	吉田平次郎
京町	小鍛冶車	宝永４年（１７０７）	三条小鍛冶宗近・童女・麾振り	竹田近江
宮町	竹生島車（以前は石引車）	宝永４年（１７０７）	能楽竹生島の人形・麾振り	奈良春日の社家某
長者町	二福神車（以前は道成寺車）	享保17年（１７３３）	大黒・蛭子・麾振り	吉田平十郎と竹田近江の合作
傳馬町	林和靖車（以前は梵天王車）	享保17年（１７３３）	林和靖・鶴追いの唐子	山本飛騨大椽
宮町	唐子車（以前は竹生島車）	宝暦６年（１７５６）	唐子・麾振り	竹田近江大椽・竹田又三郎・竹田四郎兵衛

まず、名古屋東照宮祭礼の始まりについて確認する。文献により諸説入り乱れている状況にあるが、名古屋東照宮祭礼の始まりは東照宮鎮座以前か以後かに大別することが出来る。明和五（一七六八）年の序文を持つ『張州年中行事鈔』[11]では始まりを元和四（一六一八）年としており、鎮座以前の三回忌の法事から祭礼が行われていたとされている。

元和四戌午年御三回忌御法事御執行従此時御祭礼始
毛鎗　十筋
具足着　十人
雪こかし警固四人　下七間町
さゝら摺警固五人　桑名町
西鍛冶町
御神輿
御後　御先手御足軽頭　朝比奈与五右衛門
同　長屋六左衛門

また元和四年から天明五年までの東照宮祭礼の編年史料である『御祭礼旧記』[12]では

一元和四戌午年二（四カ）月御三回忌御法事
御執行従此時御祭礼始リ候旨申伝候へ共
慥成書留メ等無御座候
毛鎧拾筋
具足拾人
雪こかし警固四人　下七間町
さゝらすり警固五人　桑名町
西鍛冶町

御神輿御後ニ御足軽頭両人歩行ニ而供奉
右之通御祭礼始リ候旨申候

とあり『張州年中行事鈔』と同じく、東照宮鎮座以前の元和四年を祭礼の始まりとしているが「慥成書留メ等無御座候」として、その始まりが不明瞭なものであることが注記されている。

他方、名古屋東照宮鎮座後より祭礼が行なわれたとされる文献もある。まず、幕末頃に記され東照宮祭礼について史料を引用し編年形式でまとめた『御祭礼全書』[13]では、天野信景が記した「尾府下御祭礼之始」を引用して元和六（一六一九）年としている。

尾府下御祭礼之始　天野信景書
元和六年庚申四月始テ神輿ヲ出シ、祭礼ヲ行ハル榊及ヒ獅子カタノ如ク前ニ行、
次ニ大母衣小母衣神輿之御先江甲冑歩行百五十人ト云云
（中略）
異ニ御祭礼始メハ元和四年ト有、此義如何三之丸御鎮座は元和五年御遷宮ナリ
是日光之取違ニヤ

ここでは元和四年の祭礼始めは日光東照宮の取り違えではないかと推測している。また「尾府下御祭礼之始」を記した天野信景の『塩尻拾遺』[14]には、

○尾府城東照宮は天和五年九月十七日遷宮
（中略）
祭礼　天和六年四月十七日始ル十六日舞楽
十七日神幸

とあって鎮座と祭礼の年号が「天和」とされているが、元和であると思われる。天明八（一七八八）年に成立したとされる『張州雑志』[15]には

練物始ハ元和六年庚申年四月毛鎗十筋　小倉鳥羽織着レ之或ノ説云細川三齋時ノ代ニ出来ル云々　具足着十人　雪轉
練ノ物　四人下七間ノ町　編木摺練物　桑名町　西鍛冶町　神輿跡殿足軽頭二人歩行ニテ火事羽織着之

とし「練物始」を元和六年としている。

次に慶應元（一八六五）年に記されたとされる『東照宮御神事記』[16]では「御祭礼旧事」と言う史料を引用し、元和七（一六二一）年としている。

元和七年辛酉年御祭礼始ト言
毛鎗拾筋、具足着拾人
雪おこし警固四人　下七間町
但従是以前御法事計、御輿御旅今年より始ト云

また『名古屋叢書』に所収されている『編年大略』[17]元和七（一六二一）年に

一今年御祭礼初云々　毛鎗具足着斗之由是より前は御法事是由云々

とあり、翌年の寛永元（一六二四）年四月十七日条には、

御祭礼　去酉年より初といへとも　車は今年より始而出る　此時囃物有ヨサレヨサレサハラハヒヤセ　是より以後御祭礼町々追々及び張大故に其初不分明といへとも　決而申伝処は今年を初めとす、

とあり、元和七年を祭りの始めとして、寛永元年より車が曳きだされるようになったと記してある。加え「是より前は御法事是由云々」とある点は、先の『東照宮御神事記』と近似している。

以上のように、名古屋東照宮祭礼の創始は元和のはじめ頃であると推測されるが、『名古屋祭』の由来では『張州年中行事鈔』『御祭礼旧記』の説をとっていると推察される。また以上の史料からは、当初の祭礼には曳きものでは無く神輿の供奉として各町から「警固」が出ていたことが分かる。

では曳きものが出始めたのはいつ頃なのか。先に挙げた『編年大略』では、寛永の頃から「車」が出たとされているが、『名古屋祭』では下七間町によって大八車二台を繋げて能人形を載せたものが元和五年に曳きだされたものを始まりとしている。

三、練物から曳きものへ

まず『張州年中行事鈔』では下七間町から「雪こかし警固四人」西鍛冶町と桑名町から「さゝら摺警固五人」が「警固」として出ていることが分かる。また『御祭礼全書』では「警固始之事」として[18]

御祭礼警固始之事
元和六年庚申四月
毛鎗十筋　小倉鳥羽織着之
或曰細川三齋時代来ルト云
具足着十人
雪コカシ警固四人　下七間町
サゝラスリ警固五人　桑名町
西鍛冶町
神輿御後御足軽頭二人　歩行ニテ
火事羽織着

『張州年中行事鈔』と同じく「雪コカシ」と「サゝラスリ」が警固としている出ていることが分かる。また『東照宮御神事記[19]』には元和七年より「雪おこし警固四人」が「下七間町」からだ出されており、「サゝラスリ」に関しては記述が無い。これらがどのような練物であったかは定かではないが、当初は曳きものが出ていなかったことが窺える。

さて『名古屋祭』には警固の始まりについて元和四年としていることから『張州年中行事鈔』を典拠としているものと思われるが、曳きものと思しきものが登場するのは、『名古屋祭』においては元和五年に下七間町から出されたとされる西行桜の車である。各文献によれば、元和五年から八年にかけて車が曳きだされていたとされている。

まず『御祭礼旧記[20]』では元和四年を祭りの始めとし、その翌年に警固に変更が加えられたとされている。

一元和五己未年
毛鑓拾筋　具足着拾人
雪こかし警固相止メ西行桜ノ車出候　下七間町
さゝら摺警固五人　桑名町
西鍛冶町
御神輿　御後ニ御足軽頭両人歩行ニ而供奉

また『張州雑志[21]』も西行桜の車を元和五年にだしたとされているが、その車の特徴として、

元和四年雪轉の練物なり同五年西行櫻の人形を大八車二輌組、其上に飾り出せしとなり

大八車を組み合わせた物に人形を載せたものとしている。他方、『御祭礼全書』[22]では「御祭礼警固始之事」に、

元和七辛酉年四月
毛鎗十筋
具足着十人
西行桜練物　下七間町雪コカシノねリ物相止
車ニ替代八車二輌ノ上飾ルト云
サヽラ摺警固
押エ御足軽頭両人

元和七年に「代八車」を用いた「西行桜練物」がだされている。『東照宮御神事記』[23]においても西行桜車が曳きだされた年を元和七年としている。

各文献により祭りの始まった年代が異なる故、下七間町の曳きものが曳きだされるようになった年代も異なるが、練物の雪こがしから西行桜の人形を載せた大八車へ替えたことは分かる。また西行桜の人形がどのようなものであったかについては、『名古屋祭』では能人形としているが、文献では少なくとも人形を載せていたことは分かるが、どのような人形であったかは不明である。

この下七間町の西行桜の車が曳きだされて以降、前掲（表四）を見ても分かるように、各町が曳きものを出していることが明らかである。

さて以下に掲げた（表三）は『張州雑志』『御祭礼全書』『名古屋祭』で示される各町の曳きものについてまとめ、備考には各文献における各曳きものについての説明を引用してある。

この（表三）を見て分かるように、下七間の西行桜の車が元和六年―異説はあるが―にからくり人形を載せた橋弁慶車へ替わって以降、各町から出される曳きものにはからくり人形が載るようになっていることが窺える。そして各曳きもののからくり人形の多くが一七〇〇年代以降、三代目竹田近江や吉田平次郎、吉田平十郎等の大阪・京都の居る「細工人」「人形工人」と称する人間の手により作成されたものであったことが分かる。

これらの内、いくつかは竹田近江作と言われている。そのからくり人形が作成されたとされる宝永四（一七〇七）年～宝暦六（一七五六）年という年代を考慮に加えると、小鍛冶車のからくり人形は初代竹田近江、二福神車のからくり人形は三代目竹田近江、唐子車のからくり人形は四代目竹田近江（縫殿之助）の手によるものと推察される。

また「尾州小細工師人二郎八」なる人物の手によって延享二（一七四五）年に湯取神子車の人形が修補されていること、湯取神子車を新造した際のからくり人形を隅田仁兵衛なる人物が作製していたことが分かる。この隅田仁兵衛は、名古屋周辺の曳きものに載せるからくり人形を多く手がけていた。他にも、一説に拠れば傳馬町の林和靖車のからくり人形を手がけた玉屋庄兵衛は享保十九（一七三四）年に京都から名古屋へ移り住んだとされ、初代以降名古屋を中心としていくつものからくり人形を作製している。[24]

つまり享保時代以降、からくり人形の補修を行える技師や、からくり人形を作製出来る技能を持った人間が尾張にいたことが窺い知れる。

以上の点から分かるのは、東照宮祭礼におけるからくり人形はそのほとんどの製作が京都・大阪に居る「細工人」「人形工人」であったこと、その内多くは竹田近江の作製であるとしていることである。しかし、前述のとおり東照宮祭礼に曳きだされていた曳きものもからくり人形も、ほぼ全てが焼失してしまい、どのような機構を有していたのか、銘の確認等が出来ないのが現状である。

ただし、二福神車についてのみ史料が現存しているので、そこを手がかりとして詳細を追っていきたいと思う。

（表３）各史料におけるからくり人形の詳細と製作者

町名	山車名	創始年代	人形師	記載	出典	備考
七間町	橋弁慶車	元和６年（１６２０）	不明	「一ニ云此牛若ノ人形最初ハ弁慶ノ持タル長刀ノ上ヘ飛来ルヤウニ繰り有シガ一羊御桟鉦ノ前ニテ繰ノ糸切レシ故是ヲ直サントテ車ノ上ヘ人登リシヲ制シ止ヌ此ヨリ今ノ如ク欄干ノ上ニテ旋廻スル而已ナリトソ」	『張州雑志』	
七間町	橋弁慶車	元和６年（１６２０）	不明	「最初牛若弁慶ガ持シ長刀ノ柄ニ飛乗ル由、御桟敷前ニテカラクリ糸切ル故ニ、直サントテ人上ニ上リシヲ役人制シ、此時ヨリ今ノ如ク欄干ノ上ニ芸ス」 「天明五巳年カラキタチ替ル、并外車ニ成、魔フリ棚出ル、人形衣装改」	『御祭礼全書』	
七間町	橋弁慶車	元和６年（１６２０）	不明	「人形の作人は不詳であるが、上段に黒塗りの五条橋を架け、其上に武蔵坊弁慶は鎧を着け坊主天蓋に鉢巻きして七ツ道具を背負ひ大長刀を持つ。牛若は太刀を抜いて干欄の上に立ちキリキリキリと踊いながら草履と戦いをするからくり」 「九郎判官義経の假面は出目法眼の作物」 「天明五年に車體を改造し夫れ迄は内車であつたを此時漸く外車として輪掛を用ひ又魔振り棚を設け」	『名古屋祭』	
和泉町	雷電車	承応元年（１６５２）	不明	「承応元壬辰年出来此人形ノ馬面ハ古作也ト云傳フ裏ニ天吉天十四年ノ六字手壕ニテ書有然ニ甚不分明或云」	『張州雑志』	
和泉町	雷電車	承応元年（１６５２）	不明	「承応元辰年出ス雷神ノ乗シ馬面作ノ面ト云、面ノ裏ニ天正ト年号有」	『御祭礼全書』	
和泉町	雷電車	承応元年（１６５２）	不明	「承応元年に同町より雷電車を作る」 「雷神の木偶を作り之を馬に乗せて其下に彩色の雲形を配置し、雷神の周囲に八ツの太鼓を輪にして飾り、傍らに天衣を以て稲妻をかたとる」 「此鬼面は面打ち林廊の作で昔は八橋大和の秘蔵品であつたを故あつて富町に傳へたといふ」	『名古屋祭』	
桑名町	湯取神子車	万治元年（１６５８）	不明	「万治元戊戌年出来 延享二乙丑年人形修補 工人尾州細工人治郎八 幕紺地明黄地金襴」	『張州雑志』	延享２年（１７４５）の修補は尾州小細工師人二郎八
桑名町	湯取神子車	万治元年（１６５８）	不明	「万治元亥年湯立ノ車ニ替ル 延享二丑年人形仕替ル、小細工師二郎八造ル」	『御祭礼全書』	延享２年（１７４５）の小細工師二郎八
桑名町	湯取神子車	万治元年（１６５８）	不明	「元和四年東照祭の年、西鍛冶町と同時にさゝら摺の警固を出し、其後四十二年を經て万治元年に湯取神子車を造る」 「人形は小細工師二郎八の作で白幣を持つた神職を据へ、前に昼竹を立て注連を張り下に湯立釜を置く、一人の神子は両手に笹葉を持ち湯立の神事をする操りである」 「天保二年に車體を改造して古車は清妙寺前へ貴却し、また同年隅田仁兵衛の手に人形の仕換へは出来た」	『名古屋祭』	延享２年（１７４５）の修補小細工師二郎八（天保２年に新調の際には隅田仁兵衛）
本町	猩々車	万治元年（１６５８）	山門山城守	「其翌年（万治三年）上本町にて新しき車を作り今の人形とハなりぬと云々」 「人形工人　京都山門山城守作」	『張州雑志』	
本町	猩々車	万治元年（１６５８）	京都山門山城守	「万治元亥年猩々車ニ成、此趣向ハ 鍛冶町ヨリ仕出シ之亜ハナシ、綱引張 其内ニ人ヲ入テ猩々ノ面ヲ冠リ、酒杓ヲ持 拍子口笛ヲ吹シヲ、翌年上本町ニテ 車ニ仕立ル、人形京都山門山城守作ト銘アリ」	『御祭礼全書』	
本町	猩々車	万治元年（１６５８）	山門山城守	「万治元年に猩々車を造る」 「視聽覆記と云ふに、万治元年猩々車を造る、此趣向は鍛冶屋町より仕出す、人形の内へ手を入れ猩々の面を冠り酒杓をもち、囃子は口笛を吹き車はなく綱を引う、その翌年上本町にて車仕立る云々」 「人形は京都天下一山門山城守の作（人形の脊に銘あり）二人の猩々を配置し前に大瓶が据えてある」 「魔振りは梨子打烏帽子に褐色の素抱で大形の白幣を持ち、その左右に若松を挿す」	『名古屋祭』	
中市場町	石橋車	宝永元年（１７０３）	吉田平次郎	「寶永元甲甲年谷ノ石橋人形 車ニ替」 「人形工人　吉田平次郎」	『張州雑志』	
中市場町	石橋車	宝永元年（１７０３）	吉田平次郎	「宝永元中年相止石橋車ニ替ル 人形吉田平二郎作、」 「明和五子年唐子并獅子拵仕替、細工人藤吉」	『御祭礼全書』	明和５年（１７５８）修補は細工人藤吉
中市場町	石橋車	宝永元年（１７０３）	吉田平次郎	「寶永元年に石橋車を造る」 「人形は京都吉田平次郎の作で左右に岩と牡丹の作り物を飾り大将の文殊大士は曲録にかゝちうて唐團扇を持つ、一人の童子は鞠を手にして右往左往する時獅子は勢ひて狂ひ戯れるといふ趣向である」 「明和五年に細工師藤吉の手で人形と獅子の修復を仕たが頭は昔の儘で毛髪を植へず今も塗頭を用ひて古雅第一名作の人形である」 「魔振りは劍先烏帽子に素袍で左りの手に幣を持つて居つたのが明和時代に唐子と改正した」	『名古屋祭』	明和５年（１７５８）修補は細工人藤吉
京町	小鍛冶車	宝永４年（１７０７）	竹田近江大椽	「寶永四丁亥年小鍛冶ノ人形車ニ替 人形工人　竹田近江大椽」	『張州雑志』	初代竹田近江か
京町	小鍛冶車	宝永４年（１７０７）	竹田近江大椽	「宝永四亥年小鍛冶車ニ替ル、人形竹田 近江椽作、」	『御祭礼全書』	初代竹田近江か
京町	小鍛冶車	宝永４年（１７０７）	竹田近江	「寶永四年に之れを廃し小鍛冶車を造る」 「人形は竹田近江の作で三條小鍛冶宗近が御劍を打つ遠前に一人の童女が居つて相槌の最中狐に變化るといふ趣向であるが、此童女が狐の面を着けてからは終始反り身となつて仰向みた態の何となく野干の趣は現われて見へるが宗近は一向平氣なもので見やりもせぬといふ」	『名古屋祭』	初代竹田近江か
傳馬町	林和靖車	享保１７年（１７３３）	山本飛驒大椽	「享保十八年癸丑年出来最初田植練物其後元禄四未年梵天王ノ車ニ替又其後舎ノ人形ニ替　人形工人　山本飛驒椽」	『張州雑志』	
傳馬町	林和靖車	享保１７年（１７３３）	山本飛驒大椽	「其後御祭禮開始より七十五年を過ぎ元禄四年に右の警固を廃し梵天王の車を造る」 「梵天王の前に一人の天女を置き大將が唐團扇を持つて招くと屋體の先へ迦陵頻伽が頭れて舞をするというからくり」 「其後四十三年の後享保十七年に之れを廃し今の林和靖車を造る」 「人形は京都の細工師山本飛驒大椽の作で、支那の成人林和靖と鶴追ひの唐子を据え前に丹頂の鶴一羽を置く傍らに霊龜があつて鶴は芹を喰わへ羽根を延ばして働くという機械」	『名古屋祭』	
長者町	二福神車	享保１７年（１７３３）	吉田平十郎	「此車始道成寺入形ニテ貞松院□不穏思弓仍テ龍頭ニ改拍子モ亦替シト也 但車出来ノ始未詳慶安三寅年ノ行烈記ハ此車有 其後享保十七年ニ今ノ人形ニ替人形工人京縄手吉田平次郎」	『張州雑志』	
長者町	二福神車	享保１７年（１７３３）	人形京縄手吉田平十郎	「始ハ道成寺 此車初ル年号不知、然レトモ慶安三寅年行烈ニ見ヘタリ、最初ハ蛇ノ形頭ハ女ノ姿ノ由 貞松院殿御嫌ニ付龍頭ニカワル」 「享保十七子年　二福神ハヤシ共替、人形京縄手吉田平次郎作、」	『御祭礼全書』	
長者町	二福神車	享保１７年（１７３３）	吉田平十郎と竹田近江の合作	「明暦二年鐘巻道成寺車を造る（慶安三年の行列附に上長者町道成寺とあるを見れば或は明暦以前の創立歟も知れぬ）此作り物は上段に鐘を据へそれへ女の頭の大蛇が出て鐘を巻く動作する時鋼鞭と太鼓でグワングワンドンドン囃子たてると云ふ騒動な趣向であつた、然るに貞松院殿といふが此車が大のお嫌ひで有つた為め其後龍頭に仕替へたと云ふ事」 「享保十七年に此道成寺車を廃して二福神車と改正した、人形は京都吉田平十郎と竹田近江の合作で寶暦時代の古圖を見ると大黒のうしろに米俵積んであつて魔振りの左右に菊の花を挿す、」	『名古屋祭』	３代目竹田近江か
傳馬町	林和靖車	享保１８年（１７３４）	山本飛驒	「最初田植警固傳馬町・冨澤町・豫河町四切ヨリ出ル元禄四羊年梵天王車ニ替ル、」 「林和靖ニ享保十八丑年替ル細工人山本飛驒」	『御祭礼全書』	
宮町	唐子車	宝暦６年（１７５６）	竹田近江大椽・竹田又三郎・竹田四郎兵衛	「最初傳馬町立合田植 練物出ス其後寛文元辛丑年石引ノ車ニ替ル」 「寶永四丁亥年竹生嶋ノ人形ニ替 人形工人奈良春日ノ社人某作ト云」 「寶暦六丙子年竹生島人形今ノ唐子遊ノ人形ニ造替 人形工人竹田近江大椽 同又三郎 同四郎兵衛」	『張州雑志』	４代目竹田近江（竹田縫殿之助）か
宮町	唐子車	宝暦６年（１７５６）	竹田近江大椽・竹田又三郎・竹田四郎兵衛	「寛文元丑年石引車ニ替ル、人形一ツ柚色 竪帽羽織ヲ着之陸ヲ持、俗ニ之人形ハ平岩主計頭殿ヲ作ルト云」 「宝永四亥年竹生嶋車ニ替ル 人形奈良春日社人作ト云」 「同年人形囃子共替ル、唐子遊台ニ居 余ノ唐子両ノ脇ニ居テ、ゼンマイヲ以テ廻ル 中ノ人形自立テ松ノ枝ニ有太鼓打芸成り 魔振モ替ル、竹田近江大椽作 同又三郎同四郎兵衛」	『御祭礼全書』	４四代目竹田近江（竹田縫殿之助）か
宮町	唐子車	宝暦６年（１７５６）	竹田近江大椽・竹田又三郎・竹田四郎兵衛	「寛文二年に石引車を造る」 「寛永四年に之れ（石引車）を廃し能楽竹部島の人形を造る、人形は奈良春日の社家某の作で俗に龍神車と呼び魔振りの頭に海老を載せたも一興であつた」 「寶暦六年に又此竹生島を止めて今の唐子車と改正した、此人形は大阪の竹田近江大椽同又三郎同四郎兵衛の合作で三人の唐子を据へ内一人は中央の壇の上に座し二人は左右に立つて壇の眞木を回轉する、此時二ツのゼンマイは舞ひ出してそれと同時に眞中の唐子は枕木と共に段々とせりあがって唐松の枝につるした太鼓を叩く」	『名古屋祭』	４代目竹田近江（竹田縫殿之助）か

四、伊藤次郎左衛門家資料にみる二福神車のからくり人形

二福神車は享保十七（一七三三）年に作られた曳きもので、『名古屋祭』によれば、からくり人形は「人形は京都吉田平十郎と竹田近江の合作で寶暦時代の古圖を見ると大黒のうしろに米俵積んであつて麈振りの左右に菊の花を挿す、人形の動作は至極単純な糸加減で蛭子殿が魚を釣り上げると大黒様は打出の小槌で袋を叩く、其袋が二ツに割れて寶船と變じたを二福神は悦んで戯れるというふ」また蛭子のからくりには「蛭子様の釣りあげる魚は鯛斗りであつたを中興鰈、鰹、蛸、海老、ふぐ抔いろいろの魚が喰ひつく」ものであったとしている。[25]

さてこの二福神車は長者町より曳きだされているが、茶屋町の伊藤次郎左衛門家に所蔵されている資料には二福神車の祭礼記録が含まれている。

所蔵されている祭礼の記録は二福神車が建造された当時の記録である『享保十六年　町内御祭礼車取替』と題する史料から始まり。祭礼において必要な金銭の明細記録や祭礼における役割分担、山車彫刻に関して、断片的ではあるが記録が存在している。その内の幾つかの史料にあるからくり人形に関連する記録について検討したい。

はじめに、享保十七（一七三三）年に道成寺車から二福神車を取り替えた際の建造記録として『享保十六年　町内御祭礼車取替』[26]の内、諸費用として、からくり人形の手間賃が記録が残されている。

一金五拾一両壱分八匁
　　取かへ
右ハ竹田人形代、大阪行上下入用駄ちんかさりや、ぬしや手間代
（傍線は筆者による）

記録では「竹田人形」とあり、大阪に人形作製を依頼していたことが窺い知れる。また、同記録にはからくり人形に付属するものについて記録が残されている。[27]

杉之屋次郎八
一六匁　鯛作ちん　合〇
一五匁五分　船ノさいしき　合〇
一一匁八分　帆さいしき代　合〇
一弐匁　箱むね鬼かハら　合〇
　　さいしき代
糸屋九郎右衛門
九郎右衛門分〆四十一匁払
一紅ひぼ高らんむすひ　弐筋　合〇
　代金壱分五匁
壱もよきゑひすノひほ　四すし　合〇
　代拾一匁
一三匁　寄糸手間代　合〇
一七匁　船ふさくろ
きんしやまぜ　二かけ　合〇
（傍線は筆者による）

「杉之屋次郎八」に「鯛」「船ノさいしき」「帆さいしき」等が依頼されており、「糸屋九郎右衛門」には「ひほ（ひも）」「ふさ」として「ゑひすノひほ」「船ふさ」が依頼されている。からくり人形で用いられる内、からくり機構以外の部品の作製や彩色については別の人間により行なわれていたことが推察される。

時代が下り明和五（一七六八）年の『明和五年　御祭礼入用払方控帳』には、唐子を修理した際の手間賃が示されている。[28]

三月十七日
内金三両渡ス
一拾匁　立浪板
直し手間
一七拾七匁五分　唐子台ぬり
一三十壱匁八厘　からこざい
十五文　はく代
〆
〆金五両ト拾弐匁八分
此銭九百三十弐文

（傍線は筆者による）

唐子の「台」が破損しその修理を依頼していたことが分かる。恐らく唐子とは『名古屋祭』[29]で言う「麾振り」のことを指していると思われる。また同文献では

三月十二日
内金弐分渡ス
一拾匁　たい　ゑほし　唐子どふくし　破そん
一弐拾匁　唐子頭壱ツ
粕善之打
一拾弐匁　手間四人分
前方破損
渡し引き残り
〆金弐両三分ト
六匁五分
此せに四百五十七文（七十一文）
右之通
五月三日ニ平四郎勘定ニ渡し

（傍線は筆者による）

とあり、「たい」や「えぼし」等が破損しそれを修復していたことが伺える。ここで言う「たい」とは蛭子が釣りあげていたとされる鯛であると推測される。また修理されている「えぼし」もおそらく「蛭子」に付属するものであったと考えられる。

次に明和七（一七七〇）年の『明和七年　二福神車役割』[30]には、祭礼時における曳きものを曳きだす際、仕舞う際等の役割がしめされている。

明和七年　寅四月
車元　傳左衛門
役者
大黒　八右衛門
与次兵衛
恵美須　キク
源兵衛
勘蔵（檀六）
袋　平四郎
市兵衛
船　大工
茂八
唐子　藤三郎

（傍線は筆者による）

この割り当ては、各からくり人形を操る人々の分担表であると推察される。

史料には「大黒」「恵比須」「袋」「船」「唐子」とあり、それぞれに役割が充てられている。『名古屋祭』が示すように、確かに「蛭子殿」や「大黒」、「袋」があり、唐子は恐らく「麿振り」であると推測される。

また嘉永四（一八五一）年『嘉永四年　御祭礼入用払方控帳』[31]には

塗師

一、八匁八分　伊兵衛〇

右江九百六十文行　ゑほし箔置直し代

として「ゑぼし」を修理している。

また人形の塗替えやからくり人形に着せる服を修理している。

一、弐拾六匁　竹田源吉

右江壱分弐朱行　人形塗替

一七拾六匁　縫屋久助

つら隠浪縫・恵毘寿

右江壱両ト　袖縫。袋縫直し

壱貫七百四十八文行

（傍線は筆者による）

人形の塗り替えの際に依頼されている「竹田源吉」は、恐らく人形の細工人の一人であると推察される。先に挙げた唐子台の塗りとは違い「人形塗替」とあることからも、細工人であると考えられる「竹田源吉」に、からくり機構を伴う本体の塗り替えを依頼されたものと推測される。

以上の史料からまず一つ、二福神車に乗るからくり人形が竹田人形であったことが分かる。つまりは、各史料に言われるような竹田近江作である可能性が高い、ということが史料より指摘できる。ただし竹田近江―この時代では三代目竹田近江か―本人の作とであると断言はできないが、竹田機巧座の技術をもって作製されたからくり人形であることは言える。

そして二つ目にからくり人形のからくり機構に関わる部分以外の作製・修理・塗り替えについては、それぞれの専門の職人の手により行なわれていたことが考えられる。逆に、からくり人形本体に関連する修補や塗りなおしについては、細工人であると推測される「竹田源吉」に塗り替えを依頼している。

さてこの「竹田源吉」は半田市の亀崎潮干祭に曳きだされる青龍車・力神車・花王車のからくり人形などを作製した人物で、弘化二年（一八四五）から安政五（一八五八）年までの作品が存在していることからも、史料に言う「竹田源吉」は細工人の竹田源吉であった可能性がある。「竹田源吉」と言う通り、竹田性を名乗り竹田人形の塗りなおしを手がけ、名古屋周辺のからくり人形を作製していることから、この時期には名古屋に「竹田機巧座」の技術の流れを汲む細工人が存在していた可能性が指摘できる。

以上のように、二福神車の例のみであるが、これまで言われてきたとおり、からくり人形は「竹田機巧座」の技術が用いられたものであったことが推察される。また、本体の塗り直すに際しては名古屋周辺のからくり人形の作製を行なっていたとされる「竹田源吉」が関与しており、名古屋に竹田機巧座の技術を有した細工人が存在していたことを確認する事が出来た。

五、むすびにかえて

名古屋東照宮祭礼におけるからくり人形の受容について、『名古屋祭』における記述の典拠確認から始まり、各町内から曳きだされた曳きものとからくり人形の概要を確認し、記録が残っている二福神車のからくり人形の作製について検討を試みた。

東照宮祭礼の始まりは諸説あるが、およそ元和の初め頃から始まり、当初祭礼においては練物が出され、山車の如き曳きものは出ていなかったことが

伺える。曳きものが出されたのが元和から寛永にかけて、下七間町が雪こがしの練物を替え大八車に西行桜の人形を載せたものを始まりとして、後にからくり人形を載せた橋弁慶車が作製される。このからくり人形を誰が作成したかは不明であるが、この橋弁慶車以降に造られた曳きものは、京都などの細工人などの手によるものであったことが史料から分かる。

その内の幾つかは竹田近江の手によるものであり、享保十七年に道成寺車から二福神車へと車を新造した長者町の記録からは、新造したからくり人形が「竹田人形」であること、その人形は「大阪」で作成されていたことが分かる。また、人形の修復・彩色については各専門と思しき職人の手により行なわれていた。また、時代が下るとからくり人形の色の塗りなおしに際しては、名古屋周辺のからくり人形を手がけた「竹田源吉」の手にかかるものであったことを窺い知ることが出来た。

以上のことから、名古屋東照宮祭礼においてからくり人形が受容されるにあたり、まず京都の細工人にその作製が依頼され、後に「竹田機巧座」の手によるからくり人形が曳きものへ載せられるようになったと推察される。この事実は先学の指摘する、「竹田機巧座」の存在が尾張地方のからくり人形に影響を及ぼしたと言う点に合致していると言える。

加え、東照宮祭礼以降も竹田性を名乗る細工人達が名古屋周辺の曳きものからくり人形を作製、もしくは修理などに携わっていたことから、東照宮祭礼のからくり人形の受容が起点の一つであった可能性を示唆することが可能であると考えられる。

ただし、東照宮祭礼の初期には京都の細工人がからくり人形が作製を担っていたことが史料より推察される。このことは、京都の玉屋庄兵衛が林和靖のからくりを手がけたことから、後に名古屋の玉屋町に居住したとの話もあるように、「竹田機巧座」の存在と共に京都におけるからくり人形の製作者を無視することは出来ないだろう。それは大阪で「竹田機巧座」を開いた竹田近江が、京都にて近江禄を賜っていたこととも関係していると考えられる。

それに関連して、江戸時代において京都の北野天満宮では境内地において傀儡戯などが行なわれていたことが『北野天満宮史料』に見えることから、京都では傀儡を扱う人々が存在しており、からくり人形と何らかの関連性があった可能性がある。

よって今後の課題としては、一点目に名古屋東照宮祭礼以前のからくり人形の製作者と、京都での傀儡戯などの芸能の関係性について明らかにする必要がある事、二点目に東照宮祭礼以後に作成された曳きものに載るからくり人形の機構と、竹田機巧座におけるからくり人形と技術的な関わりが関連付け出来るか否かを明らかにする必要性がある。以上の二点を今後の尾張地域における曳きものとからくり人形の地域展開の研究課題として提示し本稿を終えたい。

謝辞

本稿にて（図一）のデータを作成するにあたりまして茂木栄教授（國學院大學）に、また（図二）のグラフ作成にあたりましては大畑孝子氏（國學院大學学部生（当時）、平成二一年度國學院大學伝統文化リサーチセンター「神社祭礼に見るモノと心」グループ作業協力者）にご助力を賜りました。文末ではありますが、皆様方に厚く御礼申し上げます。

註

（1）山崎構成『曳山の人形戯』（東洋出版　昭和五十六年、山崎は、昭和五十年当時の「曳山人形戯」つまり、曳きものに載せられているからくり人形等の事例について、その歴史的変遷、からくり人形の構造や動作、製作者等を調査し「現状篇」としてまとめている。その「現状篇」とは別に「研究篇」を設け、からくり人形の淵源や曳山人形戯の展開についての考察を行っている。

また山崎は「研究篇」において、愛知県下における曳山人形戯の多さに注目し、近隣の大阪府で行なわれ各地で上演を行なっていた「竹田機巧座」に注目、考察

を試みている。結論としては「機巧座が直接曳山からくりに関連した文献上の証拠となるものは発見できなかった」としつつも、「竹田機巧座にコッピーライトが存在しない」故に「多くの模倣者の発生を余儀なくしている」としており、「竹田機巧座」が曳山人形に暗に影響を与えている可能性を示唆している。

(2) 千田靖子は『図説からくり人形の世界』(法政大学出版局　平成十七年、千田は、山崎と同じく、全国の祭礼について事例報告しており、比較的新しからくり人形の現状を把握することが出来る。また付録として載る「からくり人形師一覧」には、個々のからくり人形の作成年代・人形作者等がまとめられている。また『図説からくり人形の世界』以外にも『からくり人形の宝庫―愛知の祭りを訪ねて―』(中日出版　平成三年)として愛知県下でのからくり人形の載る山車の事例報告を行っている。

(3) 立川昭二『からくり』法政大学出版局　昭和二四年

(4) 山田和人「田中組「傀儡師」とそのからくり構造」(『同志社国文学』　四〇号　同志社大学国文学会　平成六年)山田和人「田中組「傀儡師」とそのからくり構造　その二」(『同志社国文学』　四四号　同志社大学国文学会　平成八年)

(5) 吉野亨「「曳きもの祭礼とからくり人形―尾張地域のからくり人形師を中心に―」」(『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第三号　平成二三年三月　國學院大學伝統文化リサーチセンター)

(6) (図一)は「山車・屋台・曳きもの特集」(『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第三号　國學院大學伝統文化リサーチセンター　平成二三年三月)「付録第2表　各都道府県における曳きものの祭礼を伝承する神社の数(形態別)」の「からくりによる演技・特殊な動作」の項目をグラフ化したものである。また(図二)は國學院大學伝統文化リサーチセンター「神社祭礼に見るモノと心」グループで作成したデータの内、愛知県のデータからからくり人形を乗せる曳きものを抽出し、その祭礼数をグラフ化したものである。

(7) この表は前掲(6)にて掲載したものに修正を加えたものである。データの典拠は前掲(1)四十二―四十四頁及び前掲(2)に掲載されている一覧表をデータ化し、記銘などの位置が判明しているものに限って備考欄にデータと出典を加え整えた。

(8) 伊勢門水『名古屋祭』明治三四年　私家版

(9) 前掲註(1)

(10) 前掲註(8)一七七―一八二頁に「祭車年代表」の註に、「編者云、雷車の承應、道成寺車の明暦は其町の記録に因つて創立年代と承知した」としるしており、伊勢は各町の記録を典拠としているとしているがその詳細について不明である。

(11) 『張州年中行事鈔』(『名古屋叢書三編』八　尾張俗諺　尾張同遊集　名古屋市教育委員会昭和五七年)二一七―二一八頁

(12) 『御祭礼旧記』(福原敏男「近世名古屋東照宮祭礼の編年史料『御祭礼旧記』」『社寺史料研究』社寺史料研究会　平成一八年)六頁

(13) 『御祭礼全書』(『新修　名古屋市史　資料編　民俗』新修名古屋市史資料編史料編纂会　平成二一年)一二九頁

(14) 『塩尻拾遺』(『名古屋叢書』第一八巻　随筆編(一)　塩尻拾遺　昭和三四年　名古屋市教育委員会)

(15) 内藤東甫『張州雑志』　昭和五〇年　愛知県郷土資料刊行会　一九頁

(16) 『東照宮御神事記』(前掲註(13)『新修　名古屋市史　資料編　民俗』)一〇六―一〇七頁

(17) 『編年大略』(『名古屋叢書』第四巻　記録編　一　昭和三七年　名古屋市教育委員会)

(18) 『御祭礼全書』(前掲註(13)『新修　名古屋市史　資料編　民俗』)一三三頁

(19) 『東照宮御神事記』(前掲註(13)『新修　名古屋市史　資料編　民俗』)一〇六―一〇七頁

(20) 前掲註(20)

(21) 内藤東甫『張州雑志』　昭和五〇年　愛知県郷土資料刊行会　七六―七七頁

(22) 『御祭礼全書』(前掲註(13)『新修　名古屋市史　資料編　民俗』)一三三頁

(23) 『東照宮御神事記』(前掲註(13)『新修　名古屋市史　資料編　民俗』)一〇六―一〇七頁

(24) 前掲註(2)一覧表「玉屋庄兵衛」の項

(25) 前掲註(8)三〇―三一頁

(26) 『享保十六年　町内御祭礼車取替』(前掲註(13)『新修　名古屋市史　資料編　民俗』)二四二頁

(27) 『享保十六年　町内御祭礼車取替』(前掲註(13)『新修　名古屋市史　資料編　民俗』)二三七頁

(28) 『明和五年　御祭礼入用払方控帳』(前掲註(13)『新修　名古屋市史　資料編　民俗』)二二三頁

(29) 前掲註(28)

(30) 『明和七年　二福神車役割』(前掲註(13)『新修　名古屋市史　資料編　民俗』年)二一九頁

(31) 『嘉永四年　御祭礼入用払方控帳』(前掲註(13)『新修　名古屋市史　資料編　民俗』)二二九頁